

現代フランスにおける移民、女性、イスラーム

——『私のニカブの下に』を読む

坂本千代

序章

2010年9月14日フランス上院は、頭からつま先まで覆う、ブルカやニカブなどの衣類を公の場所で着用することを禁止する法案（通称「ブルカ禁止法」）を可決した。この法案は、役所、医療機関、公道などで顔を隠す衣類を原則的に禁止するものである。違反した者は150ユーロの罰金を払うか、「市民教育」の受講を義務付けられることになる。また、家族などが女性にブルカ着用を強制した場合は禁固1年か3万ユーロの罰金を払わなければならない。この法律は10月7日の憲法会議においても合憲との判断を下され、2011年から施行されることとなった。

フランスではイスラーム教徒が人口の約1割を占めており、2000人ほどの女性がブルカやニカブを着用していると言われている。全国で2000人ほどの女性がつけているにすぎない衣服のことはあるが、数年前からフランスでは大きな論争となり世論を沸かせてきた。背景には、顔を含め目以外の全身をすべて覆うこれらの衣服が役所・学校などでトラブルになることがあったというだけでなく、これらの衣服そのものがフランスのイスラームコミュニティにおける女性の抑圧、さらにはドメスティックバイオレンスと結び付けられている（これらの衣服を着ることを、女性たちの家族が強要している）という議論や、ブルカやニカブを着るのは自分たちの選択であり、国家は個人の信仰に干渉すべきではないという主張などさまざまな意見が出たが、上記のように法案そのものはフランス上院で賛成246、反対1という圧倒的多数で可決されたのであった¹。

ここに至るまでにはフランス国内の多くの立場からの意見表明があったのであるが、筆者はイスラーム教徒の女性の告白やインタビューなどのドキュメンタリー本に注目してきた。なかにはセンセーショナルな興味をかきたてる、イスラームの伝統的家族による娘の強制結婚や自由束縛、あるいは一夫多妻の現状を描いたものなどもある。本稿で取り上げるのも、夫からのドメスティックバイオレンスの被害者であり、ニカブを実際に数年間着用していた女性の告白という、一般読者の注意を大いに引く要素を持った本である。書名は『私のニカブの下に』*Sous mon niqab*であり、著者はザイナ（フランス語風発音ではゼーナ）Zeinaで、ジェナーヌ・カレー・タジェ Djénane Kareh Tager との共著となっている。本書にはさらに副題として「私は命の危険を冒してそれを脱いだ」というセンセーショナルな言葉が添えられている。

著者のザイナは実名ではない。一方、タジェは何冊もの宗教関係の本を出しているジャーナリストである。おそらくこの本はザイナと名のる女性へのインタビューに基づいてタジェが書き下ろしたのではないかと推測されるが、詳細については何も述べられていない。本書は2010年5月にプロン社から刊行され評判になったものである。

本書の終り近くで、ザイナはこの本が誰に向けてのメッセージであるかを明らかにして

¹ 『朝日新聞』『読売新聞』など日本の各紙は2010年9月15日にこのニュースを掲載している。

いる。彼女によれば、自分と同じフランス生まれのアラブ人女性たち、自分のようなドメスティックバイオレンスの犠牲となっている女性の「隣人女性たち」、そして本書中に登場する（夫の要請で）ヴェールをまとうようになった従妹という、2つのグループと一人の特定の女性に向けて本書は書かれたのである。そして本書の後書き「わがムスリムの姉妹たちへの手紙」はザイナがニカブを着ていた時の仲間の女性たちにあてた手紙という形式を取っている。しかし、ザイナ自身も予想しているように、おそらく彼女たちは本書を読むことはないであろう。（夫の家を逃げ出すまでのザイナが本をまったく読むことがなかったように。）

一方、本書の裏表紙には「ザイナの物語は 21 世紀のフランス、我々の家からほんの数メートルのところまで展開されたのだ」という文章がある。つまり、これは上記の第 2 グループの読者、その大部分が非ムスリムであるような、いわゆる一般のフランス人読者を想定しているということであろう。ニカブ着用強制に代表されるような、女性の虐待に対する告発の書なのである。その内容ゆえに、ザイナは自分の身元が特定されて夫をはじめとする過激な人々の復讐と迫害の対象にされることを恐れていると本書は言う。

『私のニカブの下に』が出版されたのが、2010 年 5 月であり、フランスでブルカ禁止法案についての議論が白熱していた時期であることを忘れてはならない。このタイミングで出版したのは、本が注目され、議論を巻き起こし、売れる、ということをめざした出版社や著者の目論見があり、それがかなり成功したのではないだろうか。

本稿では、この本における主人公の衣服の変化を中心にして、イスラームの信仰と衣服の関係について考察していきたい。その際に、本書における女性の衣服やヘアスタイルの描き方を詳細に検討することによって、論争の書としての本書の戦術の特徴が明らかになるだろう。

第1章 チュニックとパンタロン

『私のニカブの下に』の最初の部分でザイナは自分の出自について次のように述べている。

私は、フランスじゅうに何万、何十万も存在するいわゆる伝統的ムスリムの家庭に生まれた。家族は信仰に厚く、毎日 5 回お祈りをし、ラマダンの断食もおこなっていた。[...]私たちは金持ちではなかったが、必要な物に不自由したことは一度もなかった²。

このように、彼女は自分がけっして特別な境遇に生を受けたわけではなく、きわめてありふれたマグレブ（モロッコ、アルジェリア、チュニジアの総称）系のフランス女性であることを最初に読者に確認させている。なお、家族構成については兄弟姉妹が大勢いたことが述べられているが、名前などの具体的な記述はいっさいない。本書で述べられていることが事実であるとすれば（この点にはおおいに議論の余地があるが）、執筆者ザイナが身の危険を感じていて、少しでも本名確定につながる事実を伏せようとしたからだの説明がつく。

彼女の家では、他の多くのマグレブ系ムスリムの家庭同様（この点は本書で何度も強調

² *Sous mon niqab*, p.9. 本稿では、この本からの引用は引用文の最後にページナンバーをカッコに入れて示すことにする。

されている)、両親が娘の行動を完全に把握管理していて、他のクラスメートたちのように学校からの帰りに寄り道をしたり、友達の家を訪問しあったりすることはなかった。そして、彼女が思春期を迎える頃になると家族の締め付けは少しずつきびしくなり、クラスメートの男子生徒はもちろん、ムスリムではない女子生徒ともザイナは付き合うのをやめてしまうのである。

彼女はとりわけ衣服やヘアスタイルといったものに関心を示し、それについて多く語っている³。本書の最初の段落においても、自分が生まれた時代(1980年代?)のファッションについて次のように説明している。

カイロやカサブランカの大学でも娘たちはジルバブよりもジーンズを身につけていた。マルセイユ、パリ、あるいはリヨンでは、アルジェリアの田舎から出てきた祖母たちを除いて、巻き毛の髪がむきだしだった(9)。

ザイナはまた自分の中学時代の服装について、他のムスリムの女子学生たちと同様であったとして、次のように述べている。

私たちはスカートをはかず、パンタロンをはいてその上にチュニックを着ていた。ヒールの高い靴を履くことはけっしてなく、顔にお化粧をすることもなかった。夏には半そでを着ることが許されたが、私の洋服ダンスにタンクトップが入ったことは一度もなかった(16)。

ザイナは従順な娘として、表面的には両親に反抗することもせず、さして熱意を覚えぬままにきちんと毎日のお祈りやラマダンなどをおこなっていたが、本心ではもっと自由な生活を望んでおり、家族の反対を押し切って働き始めていた。やがて、彼女は同じコミュニティに属する青年と知り合って、両家の祝福を受けて結婚する。彼はバスケットシューズをはき、ジーンズと皮ジャンパーに身を包んだ普通の青年だった。若いカップルの新居では1日5回のお祈りをするのではなく、ザイナはそのことに満足と開放感を感じていた。夫は結婚後も彼女が仕事を続けることに反対せず、結婚後の彼女はスカートをはくこともあった。新婚夫婦は時々二人で外出したり、外食することさえあった。

以上がザイナの本(全10章と後書き)の第2章の前半部分までにあたる。ここでは結婚前の夫の身なりがごく普通の青年のものであったことや、新婚の彼女がスカートをはいたこと、また、結婚後は毎日のお祈りをしなくなったことに注意を喚起しておきたい。

第2章 バンダナからジルバブへ

本書ではザイナの夫についても名前や職業などは書かれていない。彼が彼女と同じような出自であり、同じくらいの年齢で、何か仕事について稼いでいる(ただしそれほど収入が多いわけではない)ことしかわからない。結婚生活の最初の頃は平穏だったのであるが、ある時期から夫の交友関係が変わり、彼がイスラーム主義に夢中になっていったことがうかがえる。夫の新しい友人たちは皆あごひげをはやし白いガンドウーラ(そでなし長衣)を着ていた。ザイナは述べていないが、夫もおそらく同じ服装をするようになったのであ

³ ただし、この点については、もうひとりの著者であるタジェの意図がかかわっているのかもしれない。タジェが衣服についてこと細かくザイナに質問し、彼女はそれに答えただけだとも考えられる。

ろう。二人でいっしょに外出や外食をすることがなくなり、夫の友人と顔を合わすこともなくってくる。夫はイスラームの戒律を順守するようになって毎日 5 回のお祈りをかかさなくなり、妻にも同じことを求めるようになる。また、ザイナが職場で男性に混じって働くこと、特に同僚男性の顔を正面から見ることを夫は嫌がるようになる。スカーフをつけた女性を賞賛するようになり、ザイナの服装が挑発的であるとして暴力をふるうまでになる。夫は彼女に次のように言う。

君は僕のものだ。他の男に君を見てほしくない。君は恥じらいを持つべきだ。ぼくたちのため、ぼくたち夫婦のため、ぼくらの家族のため、イスラームのためにそうしてくれ(37)。

ザイナはスカートをしまい、もとのようなパンタロンとチュニックに戻る。スカートは彼女と夫にとって反イスラームの記号となったのであった。だが、夫の要求はその後も続く。彼は妻が家の外で髪を見せるのを嫌がるようになる。最初は抵抗していたザイナであったが、夫の懇願と暴力（彼は妻を正しい道に連れ戻してやるのだと正当化する）に負けて、頭にバンダナを巻くようになる。夫に暴力をふるわれたことをザイナは実家の家族にこぼすが、母親をはじめ家族の女性たちは、それはどこの家庭でもあたりまえのことだとしてとりあってはくれない。

髪を隠すという行為が意味すること、コーランに従い、女性の誘惑的な部分を人目にさらさない、という行為がどのように進行していったかをザイナは詳細に語っている。バンダナで覆う部分がだんだん広くなり、布も最初はおしゃれで小粋なものだったのが少しずつ地味になり、やがてバンダナを捨てて、胸の一部まで覆うヒジャブ（髪と首を隠すスカーフ）をかぶるようになる。ザイナは朝家を出る時はヒジャブをつけて通勤電車に乗るのだが、最寄り駅に着いたらすぐにそれはずして職場に通っていた。また、服装で体を覆う部分が多くなるのと並行して、彼女はイスラームの戒律を厳格に守るようになる。仕事やその他の活動にはお構いなしに、お祈りの時間を守るように夫に厳命されたので、彼女の仕事にも支障が出るようになる。

やがてザイナは妊娠し、それでも仕事を続けるつもりでいたのだが、夫は彼女にやめるように言う。双方の家族も同意見で、彼女は専業主婦となる。息子が生まれると皆が大喜びし、ザイナも赤ん坊の世話に夢中になる。そんなある日、めずらしく夫が友人夫婦を家に連れてくる。その女性のほうが黒いジルバブ（手と顔以外の全身を覆う衣装）をまとっているのを見て、ザイナは気味悪く感じ、ひそかに彼女を幽霊女(*fantômette*)と呼ぶが、夫はこの女性をほめちぎる。

その後も家事と育児のみの生活が続く。ザイナの行動範囲はどんどん狭くなり、家とスーパーマーケットとモスク、それに時々顔を出す実家のみとなる。そのうえ、必要がないという理由で、夫はザイナから車の鍵を取り上げてしまう。彼の方はひんぱんに外出し、イスラームの教義についての本を読み、テレビで説教を聞き、モスクに通う。ザイナの衣服はというと、夫の圧力のもとに、できるだけ皮膚の見えないものから、さらに体の形をあらわにしないものへと変わっていく。具体的には、それまでのチュニックとパンタロンというスタイルからローブにかわり、それも徐々にだぶだぶのものとなる。外出のさいには夏でも黒い靴下を履くようになり、真夏でもマントを着用するようになる。

夫はそれでも妻の身なりに満足しない。良きムスリムとしてイスラームの戒律に徹底的に従うことを要求して、彼は以前友人の妻がまとっていたようなジルバブを身につけることをザイナに要求するようになる。彼女は嫌がるが、最終的には彼の意志に従わざるをえ

なかった。ジルバブを着た自分の姿を彼女は次のように描写している。

ケープの褻が足にひっかかり、それは巨大な蛸のようだった。まとわりついている生きた怪物が私をゆっくり堂々とした足取りで歩かせるのだ(57)。

この生きた怪物、気味の悪い巨大な蛸のような衣服が徐々に彼女の精神にまで影響をおよぼしていく様子が次のように語られている。

暗いケープが私の体と同時に私の精神も呑み込んでしまったような不思議な感じがしたものだ。私は大声で叫びたかったが、できなかった。何ヶ月かするうちに、これを着ている人が叫んだり、話したり、意見を述べることに、そして深く考えることさえも、この衣服が邪魔していることがわかった(58)。

ジルバブを着てからの自分は3年以上笑わず、ほほ笑むことさえめつたになかったとザイナは語っている。しかしながら、彼女の家族や周りの人々は、伝統的な衣服を着て威厳のある歩き方をする、つつましい彼女をほめそやし、若い女性たちの手本・模範とみなすようになってきた。実家の近所に住む、最近アルジェリアから来たばかりの若妻は、夫に説得され、ザイナをみならってジルバブを着用するようになっていた。ザイナは「最後に見た時、彼女は蛸の中に首をうずめていて、もう笑うことをやめてしまっていた(62)」と語る。

第3章 ニカブ

前章で見たように、ザイナのまとう衣服は彼女に肉体的拘束を与えるだけでなく、心理的にもじわじわと大きな影響を与えるわけであるが、本書で語られることがらの中で、特に印象的なのはイスラームと女性の身なりとの全的な相関関係であろう。ザイナおよび周りの人々はイスラーム的完全(perfection)への道のりのどこに自分が位置しているかを、身にまとう衣服によって示すのである。

この道程において、ニカブはジルバブからの自然な帰結であり、ジルバブはスカーフ、ヒジャブからの到達点なのである。ジルバブをまとう私はこの完全なヴェール[ニカブのこと]を身につけることになるだろう(83)。

しかしザイナはニカブをまとう決心がつかない。夫が彼女のために買ってくるその衣装は彼女の目には「病的な黒い塊」としか見えないのである。だが、自分の要求に素直に従わない彼女に夫はしびれをきらし、ザイナの顔を殴るようになる。青あざができた顔を人目から隠すため、ついに彼女はニカブを着用するようになる。そしてまずは、ニカブとそれに付随する衣装の窮屈さ、拘束性が述べられる。

私の新しいローブは前と同じくらいゆったりしていたが、もっとずっと固く、こわばり、流動性や柔軟性が全くなかった。そして、とても黒かった。[...]その布は檻のように固く、死と同じくらい黒かった(80)。

ニカブの下で、私の生活は家の中だけに限られてしまった(105)。

ザイナはニカブをまとった自分がもはや何者でもなく、顔も、名前も、意志も、欲望も持たない「黒い影」になってしまったと感じるようになる。彼女はニカブを自分の「牢獄」「怪物」と呼びもする。しかし、それを着て通りに出ると、アラブ系の見知らぬ人々が彼女に対して尊敬のしぐさをし、家族は彼女をイスラームのシンボルだともてはやす。

さて、本書第 7 章は「姉妹たち」と題され、モスクに集まる女性たちのことが述べられている。これらの女性たちの間では、伝統的ではない新しいヒエラルキーができていたとザイナは言う。そこには服装による目に見える階級差があり、ニカブをまとっている女性は一番賢い「貴族」であるとして、尊重され敬われていた。内面はからっぽであるのに、外の衣装によって周りの人々から丁重に扱われることに彼女は居心地の悪さを感じる。しかし、ニカブにふさわしい行動が期待されているため、自分に助言を求めてやってくる娘たちに対してザイナは、「完全」への道を前進するための服装を奨励せざるをえないのであった。

家庭以外の世界との貴重な接触場所であったモスクでの女性たちの集会への参加に対しても、やがて夫はいやな顔をするようになり、ザイナが家の外に出るのは、子どもを学校に送り迎えする時と近所の食料品店に行く時のみとなる。非ムスリムの人々が自分を指して「幽霊」「カラス」と呼んでいるのを通りで耳にして、彼女は自分がいつか見たのと同じ幽霊女になってしまったことを感じる。一方、夫の暴力はエスカレートしていき、もはやもっともらしい理由さえない暴行となっていた。

第 4 章 ニカブからの解放

本書の最後の 2 章は怒涛の展開となっている。ある日、偶然ニカブを付けずにアパートマンの戸口に立っていたザイナは、以前から彼女に同情していた同じ階の女性（ムスリムではない）に声をかけられる。ザイナの顔は連日の夫の暴行で青あざができていたのである。その隣人女性の助けで、ザイナは息子を連れてすぐに自宅を出て、ドメスティックバイオレンスの被害者を援助する団体の扉をたたく。そして、そのメンバーの女性たちの強い要請で彼女はヴェールをはずす。

目を隠しているモスリンの四角い布を解き、私はニカブのヴェールを持ちあげた。殴打によって紫色になった自分の顔を私が意識したのは、彼女たちの視線と、彼女たちのひとりが押し殺すことのできなかつた戦慄とによってである。[...]私の表情を読まれ、考えを推測され、私が誰であるかを知られてしまった今では、私は自分が裸であるように感じた。私は「無」であることをやめた。全身を覆うヴェールが与えてくれた匿名と溶解の快適さを失った(123)。

数年ぶりにヴェールなしで通りに出た彼女は太陽の光に目がくらみ、突然広がった視野に困惑する。自分が生まれ変わりつつあるのだと感じると同時に、体の線がはっきり出る衣服と顔がむき出しになることに居心地の悪さがあり、普通の服を平気で着られるようになるのに 1 カ月かかったとザイナは語っている。また、先の引用の後半部分にあるように、ニカブからの「解放」は 2 つの相反する感情を彼女のうちに引き起こした。それほど衣服は人間と一体化し、ニカブは彼女の体と心の一部となっていたのだ。

夫のもとを出、ニカブを脱いでまもなく、幼い息子の無邪気な問いによって彼女は自分

の衣服についてさらに考えさせられることとなった。

彼は私が困るような質問、それにどう答えるべきかまだわからないような質問をした。

「ママ、なぜママの服を着ないの？ ママはムスリムでしょう？」

それでは、私の「服」がイスラームだったのだろうか(128)。

このようにザイナがまとう衣服は彼女の心身の一部となっただけでなく、まさに彼女の信仰、イスラームそのものを、それが全面的に吸い取ってしまったかのようだった。彼女の最も身近にいる息子の目にさえもそう映っていたのである。あたかも、着ている人ではなく、衣服のほうが本質であるかのよう。

本書の後書き「わがムスリムの姉妹たちへの手紙」で「あなたたちが尊敬していたのは、私ではなく、私のニカブだった。その下に何があったのかあなたたちは知っていたらどうか(147)」とザイナは訴えている。その一方、新しい生活を始めた彼女はジーンズとTシャツを身にまとうようになっていたのだが、夜、自宅でたったひとり祈りをささげる時にはジルバブに着替えていると語っている。ニカブとその拘束をきびしく非難する彼女でさえ、衣服と信仰との関係自体を全面的に否定しているわけではなく、自分が良きムスリムであることを「人目のないところでさえジルバブをまとう」という事実で強調しているのであり、イスラームの信仰の指標としての衣服という考え方の根深さがうかがえよう。

これまで『私のニカブの下に』の中のイスラームコミュニティにおける衣服、それにまつわるドメスティックバイオレンスや女性の抑圧について見てきた。あたりまえのことではあるが、家庭内暴力とニカブは常に結びついているわけではないし、ニカブやブルカを着用している女性がみな家に閉じこもることを余儀なくされて、心身ともに家族の男性にがんじがらめにされているわけではないだろう。しかし、本書の内容とレトリックの迫力は、信仰と衣装とが分かちがたく結びつき、それに対する語り手の生理的・感覚（視覚、触覚）的な反応までが非常に説得的に語られている点にある。

ここで本書のもうひとりの著者であるジャーナリスト、タジェに目を向けよう。タジェはこの本出版の前年に同じプロン社から、ルブナ・アハマド・アル・フサイン Lubna Ahmad al-Hussein という女性とともに『パンタロン着用で鞭打ち 40 回』*40 coups de fouet pour un pantalon* というドキュメンタリーを出版して、スーダンの公序警察がイスラーム法と伝統の名のもとに女性を束縛しているかを、パンタロン着用で処罰された女性の物語として語っている。この本でも、女性の衣服とイスラームとの関係が中心主題となっているのだ。女性の服装とイスラーム社会での抑圧の関係に大きく注目する本を出し、その衝撃的な内容によってタジェはブルカ禁止法案論争に影響を与えようとしたのであろう。『私のニカブの下に』は声高に女性解放のスローガンを叫ぶことなく、もっと巧妙かつ戦略的なレトリックでブルカ禁止法に賛成する世論形成の一翼を担うことをめざしたのではなかろうか。

終章

最後に本書に描かれているフランスの現代社会の問題に触れておこう。本書の最初からザイナはフランス社会内の複数のコミュニティ分立について語っている。都市郊外に生ま

れた彼女は地元の公立学校で教育を受けるが、コミュニティによる分断は小学校からすでに始まっていたと言う。

すでに、小学校の終わりごろから、民族的・宗教的な同類によるグループができていた。ユダヤ人の子どもたちは、自分たち同士で遊ぶのを好んだし、ムスリムの子どもたちも同様であり、「フランス人」と私たちが呼ぶ子どもたちはだんだん私たちとはいっしょに遊ばなくなっていった(11)。

このように家庭では自分たちと「フランス人」たちとの違いが強調され、自分たちは彼らとは別の文化を持ち、別の教育、別のしつけがあるのだと言われてザイナたちは育つのである。のちに彼女は次のように言うことになる。

真実を言えば、私たちは2つの文化を持っているのだ。ひとつは学校で教えられるものであり、もうひとつは家の中で私たちが生きている文化だ。そして家の文化が学校のそれを押しつぶしてしまう。それが「本当の」文化であり、私たちが受け入れることを要求される唯一の文化で、残りは単なる形式にすぎないのだ(76)。

本書の終わり近く、夫の家を逃げ出した彼女は自分が一種のパラレルワールドに住んでいたような気さえるのである。それほど、彼女の属するマグレブ系ムスリムたちのコミュニティとその外の世界はかけ離れており、けっして混じり合わない価値観・道徳観を持っているのであった。

このことはフランスという国家、あるいはヨーロッパや西洋世界にたいする彼女の周りの人たちの反応にも如実に表れている。モスクに集まる人々は9・11事件に快哉を叫び、アルカイダを支援するためのカンパを集める。彼女は次のように回想している。

夫は時々ひとりでフランスや西洋に対する痛烈な批判をおこなっていた。私はそれを聞いても心を動かされることはなかった。私は自分が西洋人であるとも、フランス人であるとも感じなかった。あえて言えば、アラブ人だった(110)。

彼女は夫の家から、自分の属していたコミュニティから逃げ出したあと、「フランス人」たちの間で暮らすことになるが、そこでまず直面したのは福祉関係の役所や慈善団体の融通のきかなさと縄張り意識、困難な状況に陥っている人々に対する理解のなさであった。夫や家族からの追跡をかわすため定まった住所を持たない彼女と息子はホームレスとしか認識されず、しばしば寝る場所も食べ物もなく戸外に放り出されたからである。ザイナによれば、このような女性を待ち受ける売春などの誘惑を、息子に対する愛情でなんとか切り抜け、いくつかの幸運（自分の身元がわかってしまうことをおそれて彼女はこのことについてほとんど何も語らない）と不屈の意志で、新しい生活を軌道に乗せることができたのである。

本書の終わりにおいて、ザイナは夫との離婚を勝ちとり、精神的・経済的に自立している。職場では同僚に尊敬される女性であり、ひとり息子の良き母親の役割を果たしながら、アラブに対する信仰（ただし外には出さない）を持ち続ける女性として自分を描いている。これは現代フランス社会にうまく適応した理想的な（つまり、今の社会にとって望ましい）ムスリム女性像として提示されていると言えよう。彼女が実在の人物であるとすれば、ジャーナリストのタジェが彼女のドキュメンタリーを出版した理由はそこにあるのではなか

ろうか。

本稿では『私のニカブの下に』において、特にザイナとイスラームの関係が彼女の衣服やヘアスタイルの変遷として描かれていることに注目して考察した。本来イスラームの「完全」への道のりの指標であったはずの衣服が徐々に着る人の心身を束縛するものとなり、ついには着る人の個としてのアイデンティティを消し去ってしまい、さらに、いったんこのような衣服との一体化状態に達すると、いわゆる普通の状態に戻るのがいかに難しいかが描かれているのである。

本書の著者はフランスのムスリム社会における女性抑圧構造に抗議しており、本書がブルカ禁止法案を支持しようとする意図で出版されたものであることは確実であろう。しかし、その主張を直接的に声高に述べるのではなく、衣服という、女性の体に密着したものに対する皮膚感覚に基づいたイスラーム像およびマグレブ系コミュニティ像を提示していることが、本書の説得力の源となっている。また、本書は現代フランスにおける多文化共存の提示する諸問題や、社会的弱者救済システムの不備についての具体的で詳細な報告ともなっている。本書で語られているさまざまな問題は、まだフランスほどではないにしても、いやおうなく多文化共存が進行している現代日本が今後おそらく遭遇することになる課題でもある。

【本稿で取り上げた文献】

Zeina avec Djénane Kareh Tager, *Sous mon niqab*, Plon, 2010

【参考文献】

Lubna Ahmad al-Hussein avec Djénane Kareh Tager, *40 coups de fouet pour un pantalon*, Plon, 2009

辻村みよ子・大沢真理編『ジェンダー平等と多文化共生』東北大学出版会、2010

内藤正典『ヨーロッパとイスラーム』岩波新書、2004

宮島喬編『移民の社会的統合と排除』東京大学出版会、2009

ルネ・レモン『政教分離を問い直す』青土社、2010